

開催地名	大阪府狭山市
開催日時	令和8年1月18日(日) 10:00 ~ 11:30
開催場所	大阪狭山市立コミュニティセンター
語り部	柳迫 長三(広島県広島市)
参加者	令和7年度安全安心スクール市民40名
開催経緯	本市では、平成20年からスタートした防災・救命・防犯について学び、いざというときの為の知識や技術の習得により、地域の防災、防犯力を高める事を目的として安全安心スクールを開校しています。その一環として消防庁のプロジェクトを通じて防災講演会の開催に至る。
内容	<p>◇はじめに</p> <p>私の故郷、広島市では土砂災害が度々起こっている。被害は広島市のみならず近辺都市にも影響が出ており、それぞれの町の地域防災リーダーたちと広島市の防災リーダーと一緒に、自主防災会の会長の推薦に基づき、防災士を育成する活動を行っている。また、子どもたちに防災学習を実施する活動も行っている。</p> <p>(1) 広島における災害の現状と特徴</p> <p>広島では過去に多くの水害被害を経験してきました。平成11年6月29日の広島豪雨災害、平成26年8月20日の豪雨災害、平成30年7月にも被害に遭い、20年間の間に3度も大きな水害を経験している。この水害で多くの方を亡くしましたが、近年においても災害が繰り返されるたびに死者数が増加する傾向にある。他県と比べて広島での水害は、山間部ということも相まって豪雨による崖崩れや土石流が頻繁に発生するため、水害における関連死が非常に多いのである。土砂災害防止法など制定されるが、災害に遭うたびに法律がどんどんと変わっていくのが特徴である。</p> <p>また、平成26年の8.20災害の時には、テレビ報道で線状降水帯という言葉が初めて使われたほど、短期間に猛烈な雨が降り非常に多くの犠牲者を出したのである。1時間に100ミリの雨が降るといわれても、災害の経験が無い人にとっては、どれだけ恐ろしいことなのか判断できない。被害を減らすためには、みんなが災害を我がことと考え、自然現象に関心を持つということが非常に重要であると考えます。</p> <p>(2) 避難と行政・住民の役割</p>

過去の災害では、夜間の避難勧告が遅れたことが反省点となり、現在は明るいうちの早めの避難が推奨されているが、避難勧告の発表が早すぎるが故に、避難する人がいないという状況にも陥っているのが現状である。また、避難所へ向かって避難所の鍵が開いていない、行政の担当者が現場に到着していない事案が発生し、現在広島市では行政に頼り切ることを止め、町内会の自主防災会長が避難所の鍵を預かり、自ら開設できる体制になっている。

避難所開設の舵を切ることは大変な役目ではあるが、行政に任すよりも確実に自分たちで行う方が避難民の満足度も高いので、そのためには食料や物資などを備蓄して、訓練を計画・実施する主体性が必要だと考える。少しずつ各自主防災会で防災への対応力をつけることを目的としている。

他にも、広島市では行政から団体へ給付される支援金を使って、広島市民の防災力を向上させる目的で防災士の養成講座や資格取得を目指し、力を入れて現在も活動を行っている。

### (3) 地域コミュニティとボランティア

広島では、たびたび土砂災害で被害を受けていることもあり、市民が災害慣れの状態になっている。そのおかげでテント設営や避難者のニーズ把握、被害状況の把握、資材（スコップ等）の調達など、ボランティアの受け入れ体制が非常にスムーズである。行政に頼らずとも自分たちだけで運営活動ができると判断したのである。徐々に市民の防災に対する知識も上がってきたこともあり、ボランティアの関係と避難所の関係も向上し、過去の経験を糧にボランティアセンター運営に活かしている最中である。

### (4) 災害から学ぶべきこと

広島豪雨災害時、危機感を持って避難勧告が出たタイミングで事前に避難した人はかなり少なかった。誰も災害レベルを予想できず、実際に災害が起きてみないとわからない状況であったからである。そもそも避難勧告を認知していなかった人、周囲の人が避難しているにも関わらず他人事のように考え避難しなかった人がほとんどである中で、いかに被害が出る前に、事前に避難してもらうことが難しいか痛感したのである。人間一度や二度言われただけでは、なかなか素直に聞き入れてもらえないことが多いので、テレビ中継での避難勧告、行政からの避難勧告、そして自主防災会の我々が三度目の勧告を出せるような地域づくりを目指して活動している。

平時から避難経路や避難場所の確認をして、自分の命を守るための行動を取り、どうすれば避難を積極的にしてもらえるか、そういったことも踏まえ防災教育として、若い世代、子どもたちに伝えていくべきである。

#### (5) 落合学区の避難所運営と訓練について

避難所生活では必ず人間の嫌な部分、弱さなどが露呈するものである。食事など支援物資を奪い合ったり、プライバシーをめぐる争ったり、社会的弱者への配慮の欠落などが垣間見えるのである。避難所の環境を快適なものに、みんなが安心して尊厳を最低限保てる生活を送るために、国際基準で定められたスフィア基準に則り、来たる災害に備え、できる限り今から環境整備を図るべきであると考ええる。

避難時の食料問題では、自分たち自主防災会・地域で備蓄できるものは備蓄して、避難してくる住民にも自分の1週間分の食事は自分たちで備えてもらうなど、リーダーたちが主体となって指針を示すことが必要である。災害においては行政をあてにすれば、他人事のように考える人が多くなり、いざという場合にモラルを乱す側に回ってしまい、統制が取れなくなることにも繋がってしまう恐れがあるためである。

訓練においても同様のことがいえるが、行政をあてにしてしまうと弊害が生じてしまう。行政に対して運営を行うものではないからである。災害時には、地域住民たちを対象とするため、その対象の住民からどんな訓練をしてほしいかなどの希望や意見を発信してもらい吸い上げる、住民のための訓練・運営を行う事が大切である。例えば安否確認の手法として黄色いタオル訓練を取り入れたが非常に効果的であった。

訓練の他にもハザードマップを活用して自分が住む地域の災害を知る。避難場所の確認や経路などを家族で統一した認識を持つておくなど、備えることを怠ってはならない。行政の指定した避難所・避難場所に限定せず、自分たちの命を自分たちで守れる場所や建物を選定して、自主的に災害に備えることが大切である。

#### (6) 防災教育の取り組み

現在、小学4年生から6年生を対象にキッズ防災士の教育を行っており、カリキュラムを作成して防災士の資格取得を目指して活動している。授業を通して一人一人の防災の知識を深め、この先自分たちがどうやって防災の強い地域づくりをしていくのかを伝えている。

他にも防災委員会を設立し、若年層の若い力を取り込む活動を推進している。地域づくりの観点で若い力は必要不可欠である。学生防災士や女性の防災士をどんどん増やすことを目標に組織的に活動を行っている。

	<p>(7) 今後の課題と教育</p> <p>現代の住宅は密閉性が高い造りになっているため、環境面では非常に住みやすくなった反面、雨音や風音の音も防いでしまい危険を感じにくくなっている。</p> <p>大雨の際には、自分の庭で何ミリの雨が降っているかなど、身近な自然現象に興味を持つこと、備えることが大切である。</p> <p>また、今の若い親世代は学校で防災を学ぶ機会が少なかったため、子供たちへの教育を通じて、命を守る行動、防災教育を継承していく必要があると考える。</p> <p>◇最後に</p> <p>防災活動の本質は、近所で挨拶を交わし顔見知りになり、自分の知っている人を増やすことで何かあった時に助けを求められることができる、その助けに応じて駆けつけてくれる関係性を作ることだと考える。</p> <p>どれだけ地震や水害について知識が高まっても、自分が地域に根付いていなければ本当の意味で防災ではない。何かあった時にはお互いが助け合う、その関係性を作ることこそ、強い地域づくりであるとともに、その行いこそが最大の防災に繋がると考える。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>防災意識向上プロジェクトの「地域づくりは防災から —災害から命を守る—」というテーマで広島豪雨を体験された講師の実体験に基づき、わかりやすく地域防災の在りかたなど、とても貴重なお話を聞く事ができました。自分の命は自分で守るという、自助・共助の強化に向けて、市民の防災意識を高めていきたい。</p>